は、３１７年に江南の貴族や豪族たちの支持を得て東晋を建国し、東晋の元帝となります。しかし東晋の皇帝の権力も必ずしも安定したものではありませんでした。４２０年、第10代安帝が臣下の劉裕（りゅうゆう）に殺害されます。安帝の弟が恭帝に即位したものの、強制的に劉裕に皇位を譲ることになり、結果劉裕が宋を建国し、武帝となります。宋は４７９年まで続きます。

一方華北では、３８６年に前秦崩壊後に独立した北魏（ほくぎ）が、４３９年太武帝によって華北を統一して五胡十六国時代を終焉させます。これによって中国では南北朝時代を迎えることになります。ちなみに北魏は５３４年まで続きます。

図２　５世紀の東アジアの勢力図

３．ヤマト王権の変革

このような、東アジアにおける大きな動向の中で、ヤマト王権もまた大きな変革を求められるようになります。まずは、４世紀には大王墓が大和盆地を中心に造られていたものが、５世紀に大阪湾に面した和泉、河内の一角に集中して造られるようになります。また、前方後円墳が巨大化します。

また、渡来系の技術が積極的に導入されます。例えば副葬品に目立って出土する刀剣や甲冑といった武器・武具は渡来系の鍛造技術や金工技術を裏づけるものであろうし、また登り窯を用いた埴輪、そして須恵器が大量生産されるのもまた渡来系技術の導入がもたらしたものと言えます。大陸における混乱の中で、大陸からの人の流入がありました。その渡来人がもたらした技術をヤマト王権は積極的に導入し、そしてヤマト王権の管理に置くようになりました。

朝鮮半島の軍事支配権をめぐる高句麗との戦争は、ヤマト王権を中心とした日本列島各地の首長層とのネットワークを強めることになります。

一方で、５世紀には『倭の五王』が、東晋、宋、斉（さい）、梁（りょう）と中国南朝に使いを送ります。特に倭王珍、倭王済、倭王武などは、朝鮮半島南部の軍事支配を認めてもらうよう、中国王朝に正式な任命を求めています。

ヤマト王権は４世紀後半から５世紀にかけて、経済力、軍事力を強化し、倭国を一つの大きな政治体制へと確立させていく礎を敷いていったのです。（後編へ続く）

【参考文献】
・東潮 2015『第二章中期古墳と東アジアの動向　倭の五王の時代の国際交流』『中期古墳とその時代－５世紀の倭王権を考える－』広瀬和雄編（株）雄山閣 P74-83
・一瀬和夫 2011『巨大古墳の出現－仁徳朝の全盛』（株）文英堂
・熊谷公男 2015『第三章　文献資料から描く五世紀の大和政権　倭王武上表文の真意－いわゆる「高句麗征伐計画」を中心に』『中期古墳とその時代－５世紀の倭王権を考える－』広瀬和雄編（株）雄山閣　P131-141
・重藤輝行 2015『第一章　古墳時代中期の日本列島　九州』『中期古墳とその時代－５世紀の倭王権を考える－』広瀬和雄編（株）雄山閣　P20-29
・広瀬和雄 2015『第Ⅰ部　海浜型前方後円墳を考える』『海浜型前方後円墳の時代』公益財団法人かながわ考古学財団編（株）同成社　P1-38

第 30 回　国民文化祭かごしま 2015　大崎会場『横瀬古墳とヤマト王権のつながり』（10 月 31 日～ 11 月 1 日）

有識者によるパネルディスカッションの様子

俳優・日本考古学協会会員の刈谷俊介さんによる基調講演の様子